

朝日連峰 大朝日岳山麓

ハチ蜜の森から



聖夜にお客様から素敵な写真と詩が届きました。
この恐竜を見て何を想像しますか？

ハチ蜜の森

採蜜ができるトチやキハダをはじめマンサク、コブシ、カエデ、ヤマザクラ、ドウタン、ウワミズザクラ、ミズキ、クリ、ハクウンボク、タラ、コシアブラ、センノキ、ヌルデ、クズ、イタドリ…と、数多くの蜜源植物を抱える森のこと。ハチ蜜の森キャンドルはその森の入口にあります。

No. 33

一匹のみつばちが、生涯にこしらえるはちみつは、小さなスプーン一杯にすぎず、してみれば一匹のみつばちが生涯に吐き出す蠟はたぶんその数十分の一。人とみつばちとの付き合いは、石の斧で狩りをしていた頃からというけれど、みつのみならず、この貴重な蠟をかすめとることをおぼえ、それを使ってろうそくをつくる術を手に入れたのはいつのことであつたろう。魔法の蠟からつくりだされたこゆび一本ほどの魔法のろうそく。そこに火をともすとき、その焔のゆらめきの奥に、何百匹ものみつばちの生涯があつたことを想わずにはいられない。星あかりよりもほのかに、月明かりよりもやさしく、聖なる夜をつつみこむ魔法のひかり。みつばちのいのちから生まれた、聖なる夜への贈り物。

～Merry Xmas！～

編集発行

ハチ蜜の森キャンドル

代表 安藤 竜二

☎990-1573 山形県朝日町立木 825-3

☎とファクシミリ 0237-67-3260

メール mitsurou@alto.ocn.ne.jp

ホームページ www.mitsurou.com/

発行日 2011年2月14日

ラオスの森キャンドル

JICA（国際協力機構）の一村一品運動の技術支援アドバイザーとしてラオスに行ってきました。実は、1年以上も前からラオスの国内外の観光客に売れる蜜ロウソクを作るための指導という依頼を受けていたものの、なかなか気持ちが動かなくていました。

渋りに渋った6月、担当職員の本村公一氏（IC-NET所属）から、ハチミツも蜜蝋も収穫量が減っている現実をメールで知らされました。異常気象と、大規模なゴムのプランテーション（植栽）による森の減少が原因らしいとのこと。そして最後に「蜜ロウソクの質を上げて需要を増やすことが森を守る機運になるのではないのでしょうか？職人達も心待ちにしています」と。本村氏は学生の頃からラオスと関わりラオスを愛している人なのです。ハチ蜜の森キャンドルのコンセプトと重なり、心がぐらぐら揺らぎ始めました。

23年前、「蜜ロウソクの美しい灯火で人と森の距離を縮めたい」そう願って本格的に取り組み始めたのが私の「ハチ蜜の森キャンドル」です。その頃の日本は、拡大造林事業と称した大規模森林伐採、伴う大規模林道工事事業、伐採により引き起こされた土砂災害を防ぐ砂防ダム工事事業、さらにはリゾート法に守られたゴルフ場開発、都会のゴミが押し寄せる産業廃棄物処理場計画…。国を挙げて自然を破壊する取り組みが成され、小さな私の町にも全て牙をむいていた時代でした。「反対しているだけでは解決にならない、森の魅力を伝えたい」と思ったのです。

いただいたラオスの蜜ロウソクは、正直なところ粗末な作りで、煤も出て、美しい炎ではありませんでした。ラオスではロウソクは寺院のお供えにするものだそうで、普段家庭で灯すことはないとのこと。充分役割は果たしているのでしょうか。また、養蜂はわずかでハチミツも蜜蝋も大半は野生のミツバチのものだそうです。試作してみると、私の蜜ロウソクと同じように美しい炎にすることができました。独特な香りもあり、とても魅力的なテーブルキャンドルに



なりました。

「吟味して作った蜜ロウソクを豊かなラオスの森の象徴「ラオスの森キャンドル」とブランド化し、国内外の多くの人に知らしめることが、ラオスの森の価値を見直す一歩となるかも知れない」熱い思いが、私の胸にも込み上げてきました。空いていた一週間を見つけ、残業して注文をこなし、取る物も取らず飛行機に乗り込みました。

日本と大差ない風景の首都ビエンチャンを抜けると、どんどん昔へタイムスリップする様に田舎の風景が広がっていきました。人の生活域と境いのないハイウェイには、牛や山羊など家畜の群れが度々道を塞ぎました。バイクの二人乗りや犬の放し飼い、車が通り過ぎたあとの砂煙などは子供の頃の風景のようでした。

はじめに訪ねたサバナケットで、現地の蜜ロウソク作りを拝見しました。つり下げられた糸に温めた蜜蝋の固まりを付け、手のひらをすりあわせながら巧みに細く伸ばしつけていました。まるで機械のようにどンドンスティック状のロウソクが出来上がりました。私のたった20年ちょっとの歴史に対して、ラオスでは昔から伝統として蜜ロウソクがこうして作られ、寺院に納められていたのです。「粗末な作り」と思っていた気持ちはすぐに改心させられ尊敬の念に変わりました。

早速、インスタントにこしらえていった小さな道具を使って、灯して楽しむためのテーブルキャンドルの作り方を紹介しました。しかし、炭が熱源だったり、高い気温に邪魔されたりして、情けないことに教える側が教えられるよう

でした。そこにラオスの職人たちのプライドも感じました。

次に訪れたサラワン地区では、反省も踏まえできるだけ現地のロウソク作りを尊重することに努め、なんとかうまく伝えることができたようです。みんな楽しそうに作ってくれました。しかし、日本にはあたりまえにある道具がないラオスでは、吟味されたものを作れるようになるには相当に入れ込まないと難しいことを感じました。

市場に行くと、蜜ロウソクが他のお参り用品と共に束になって並べられてありました。蜜蠟は神聖な灯火なのです。

野生のミツバチは、コンクリート製の大きくて高い水道タンクの下に三群巣営巣しているのを見つけました。今回は直接蜜蠟を収穫する生産者とは会えなかったのですが、好んでそこにいるのか、住処を追われてそこにきたのかの判断はつきませんでした。

サラワンでは青年海外協力隊の佐々木若葉さんにも手伝っていただきました。普段担当している藤つる細工の村では、藤つるを採る森がなくなってしまい、藤の植栽を始めたことを聞きました。交流会では、蚊が媒介するデング熱で一ヶ月入院していたという隊員もいて、それでも活動を続ける熱い思いに敬服しました。

帰りの車中、道路際にゴムのプランテーションがどこまでも広がる風景を見ました。植栽に備えて痛々しく伐採している所もあり、日本の山がどんどん切られ杉山に変わっていったこと、とても似ていると思いました。

あとから少しずつ分かってきたことですが、ラオスは長年貧困国として位置づけられていましたが、実際には、水稻や、長いスパンで場所を替える焼き畑、そして森からの豊富な収穫物により、生活そのものは豊かな国だったのだそうです。しかし、日本企業の紙のための伐採に続き、現在は中国やベトナム資本のゴムのプランテーションがもの凄い勢いで広がっているのです。国は国民に自由に使わせていた森をどんどんプランテーションに売りました。その結果、首都ビエンチャンなどの大きな町は急激な経済発展により都市化が進みました。しかし、

農山村部では、森からの収穫も減り、成り立たない狭い土地での焼き畑の収穫も減ってしまいました。人々の貧困化は本当に進み、わずかな畑もさらにプランテーションに現金と交換してしまう人もいるとのこと。こうして極端な格差社会となってしまったのです。

少しかじった程度では本当の姿は見えていないのかもしれませんが、ラオス国家はそんな農山村部の経済力を高めるために、着目していた日本の「一村一品運動」を実施すべく、本家の日本へ協力を求めてきたという背景があるようです。

日本に戻り、悶々としていました。吟味されないB級のロウソクで果たして魅力を伝えられるか？売れるか？吟味した蜜ロウソクを作れるようになって、野生のミツバチをさらに消費消耗させることにならないか？良質な蜜蠟に気づいた大手資本が介入してこないか？なにより、蜜蠟を枯渇させて寺院のお供えにする伝統を害することにならないか？もともとおこがましい取り組みだったのではないかと…。

現地の本村氏と製造指導メールのやり取りをしながら真剣に考えました。現在もその答えは見いだせてはいませんが、変わらずにいられない時代の入口で、一つの価値観の種を落としてきたことは事実です。生活や伝統そして環境を守る一つの手段として彼らなりに応用してくれることを心から願っています。

ラオスは私にとっても、大切な「ハチ蜜の森」となってしまったようです。いつかまたラオスの職人達から要請があったなら自費でも駆けつきたいと思っています。



NEWS

今森光彦氏が取材に見えられました

6月、あこがれの昆虫写真家今森光彦さんがNHK BShiの「日本の里山100選」の取材に見えられました！我が家の子供たちは今森さんの昆虫図鑑で育ったのです。さらに、10日間滞在なされたスタッフの皆さんは、子供たちが欠かさず見ていたNHK「生き物地球紀行」や近頃では緒形拳の「プラネットアース」の取材など地球中を撮り回っている皆さんでした。

取材は、朝日連峰山麓での採蜜、蜜源樹のトチノキ、40年程前に父や祖父が植林した森、そして蜜ロウソクと、一つ一つハイビジョンカメラで丁寧に記録されました。

最後の日、子供たちが使っていた今森さんの昆虫図鑑を持って行って、サインをしていただきました。スタッフの皆さんからもいただきました。大切な家宝となりました！

NEWS

さらに今森氏とテレビ収録

ところが9月、編集集中に急遽生物多様性会議に合わせた特集番組を作ることになったそうで、今度はかやぶきの里で有名な京都府美山村へ行ってきました。全国から数人の里山人を囲炉裏端に招き、映像を見ながらゲストと話をすることで、ゲストは今森さんと「ふたりっ子」の三倉茉奈さん、城戸真亜子さん、司会が徳田章さんと大桃美代子さんでした。芸能人に慣れていない私は緊張しまくりでしたが、ロケバスにロケ弁、見学者の歓声にもその気になり（笑）いい思い出ができました。番組は、翌月に素晴らしい映像とともに緊張で引きつった私の顔が無事放送されました。



左から 私、今森氏、茉奈ちゃん、城戸さん

NEWS

東京銀座「銀パチ」の蜜ロウソク

銀座松屋のチャリティーキャンドル事業に製作協力することになり、蜜蝋の生産元の「銀座ミツバチプロジェクト」を訪ねました。

屋上からビル街に飛び立つ都会生まれのミツバチを見つめていてなんとも複雑な心境になりました。ここでは農薬から避難させなくても、熊除けの電気牧柵を張り巡らさなくても、毎日スズメバチパトロールしなくても…良いのです。

そして皇居周辺の森や街路樹から、季節ごとに様々なたくさんの蜜を大量に収穫できること。もちろんまだ蜜源に対して群数が少ないことが大きな理由だと思いますが、やっぱり東京はなんでも手に入る所なのですね。田舎のお株を取られた気がして、忘れていた都会への嫉妬心が久しぶりに疼きました（笑）



ミツバチが入り出る屋上の壁のすき間からの風景

NEWS

日テレ「世界の果てまでイッテQ!」に協力

同番組のイッテQ!カレンダープロジェクト8月編は、タイの信仰行事の「灯籠飛ばし」だったのですが、その燃料に蜜ろうが使われるということで、ロケ前のスタッフ予習として予想される精製方法をちょっとだけアドバイスさせていただきました。

放送では現地でおセロの松嶋尚美さんがミツバチから蜜蝋を採集する所から挑み、村を挙げて協力する姿が放送されていました。灯籠は秋田県西木村の紙風船飛ばしと似ていて、1メートル程の紙気球を作りその下に蜜蝋に浸けたトイレトペーパーの輪切りをぶら下げて火をつけ一斉に1000個を飛ばすものでした。夜空に舞い上がった灯籠はまるで天の川のように想像したより遥かにきれいでした。いつか見に行きたいと思いました。

STAND

本場の「ピラミッド燭台」拝見しました

12月、東京講座の帰りに、お言葉に甘えて横浜の青井富三子さん宅を訪ねました。青井さんはドイツにお住まいの時に購入された本場のピラミッドをお持ちなのです。20年程前から私のロウソクを使っていただいております。点火すると、熱で上部の羽が回り始めました。そして様々なかわいい木の人形達がくるくる回り始めました。大きな仕掛けが本当に回り感激しました。人形達も一つ一つ手作りの職人技で作られていました。夜に灯すと天井に羽根の影がくるくる回り、さらにロマンチックな雰囲気を楽しめるのだそうです。私の蜜ロウソクはこんな素敵なお所で活躍していました。嬉しかったです。



ご紹介いただきました

・Kappo (仙台闊歩) で連載

仙台発東北を紹介する写真情報誌「Kappo」(隔月発行)で昨年春より連載していただいております。文は川野達子さん。写真は長谷川潤さん。

何度も取材に見えられ、四季の風景とともにハチ蜜の森キャンドルを紹介して下さっています。文と写真の絶妙な調和をぜひご覧下さい。

No. 46~No. 50

Amazonでも購入できます!



- ・「リンネルHOME」 vol.3 (宝島社)
- ・「basket.」 Vol.3 (主婦と生活社)
- ・「The parkhouse」(三菱地所)
- ・「きれいな部屋の収納とインテリア」(学研)
- ・「SIMICOM」(イオン化粧品)

ありがとうございました。

アンドリュー昆虫記①

芯糸のパイプにオオハキリバチ

何かに使えると思い、捨てずにおいた灯芯の糸巻きの芯(パイプ)を数えてみたら、およそ400本になっていました。ロウソクを作り始めて22年分の軌跡がここにあります!

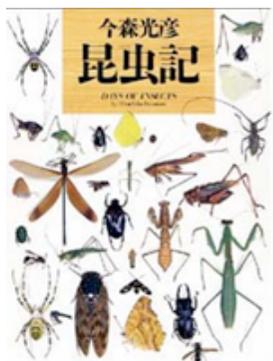
これを使って以前から企てていたことを昨年はついにやれました。それは蜂の産小屋です。マメコバチやドロバチなどは葦や竹などの穴に餌を運び産卵するのです。ただ、穴の大きさが蜂の種類も違うので、この少々大きめの穴には誰がやってくるのか楽しみにしておりました。6月に工房の壁に木枠を設置してそこに重ねて入れておきました。



そして7月、思いがけず大きなオオハキリバチが何匹もきました。大きな体に大きなあごを持っているので温厚なのに怖がられている蜂です。頭から入ったりおしりから入ったりとせわしなく働き、いつまで見ても飽きませんでした。秋に確認したら6割位は入口が泥で埋められていたので、一本に数個の卵を産みつけられたとして、春には1000匹以上が生まれる計算になります。とても楽しみです。

実はこの蜂には、もう一つ楽しみにしている生態があるのです。スズメバチ駆除を頼まれて駆けつけたら、この蜂達が100匹以上騒がしく乱舞していたことがあったのです。体が大きいので迫力があり驚きました。おそらく雄蜂たちが交尾しようと雌蜂たちが生まれてくるのを待っていたのだと思います。今年の春は同じ騒ぎを工房で見られるかも知れません。今からとてもワクワクしております。

『昆虫記』



今森光彦 著 (福音館書店)
3360 円

我が家の昆虫図鑑。15年程前、立ち読みして、飛翔するミツバチを正面から接写した写真に一目惚れして購入しました。

取材の折り、今森さんが撮影した時のことを教えて下さいました。なんと二階の部屋の中でミツバチを飼って窓から自由に入出入りさせていたのだそうです。さすがです。

エピソード

ケンタッキーフライドチキンのCMに

昨年一番のサプライズ！

KFCケンタッキーフライドチキンのテレビCMに、人知れずうちの蜜ロウソクが使われていました。地デジ用に大きめのテレビを買いかえていなかったら気づかなかったでしょう(笑)



少年の肩越しに三本枝キャンドルが!
(KFC公式サイトより抜粋)

寒天

小さい頃、お墓参りに父の実家に行くと、毎年楽しみだったのが、おばさんの作ってくれた「寒天」でした。砕いたくろみがびっしり閉じ込められているものです。私が兄弟の中で一番楽しみにしていることを知っていて「竜くんのために作って待ってたよ」と言って出してくれました。私が大人になってからも何度か出してくれたことがありました。

おばさんの作る寒天は砂糖を使っていたと思いますが、母はハチミツで作ってくれました。牛乳に缶詰のみかんを閉じ込めたものが大好きでした。

兄が中学生位の時に、興味本位で寒天を作ってくれたことがありました。それはなにも入ってない透明なものでしたが、切って皿に載せるとプルプルんしていておいしそうでした。それに当時大好きだった「みつ豆缶詰」の四角い透明ゼリーと同じに思えました。ところが口に入れてみてびっくり。甘くないのです。ハチミツを入れたというのですが、少量だったらしく全然甘くないのです。寒天好きな私は、甘みがない寒天がまずいことを知りショックでした。それでも、もったいないので、兄をにらみながら、ハチミツをかけて食べました(笑)。

ハチ蜜の森料理店の開店の目処は、未だ全くたっておりません。もう暫くお待ち下さい。

表紙紹介

私は「天を見つめて地上の平和を懇願する泣き虫で優しい恐竜」のように思えて感動しました。ザウルス作者の郡為彦さんは魔法のロウソクと出会えたと言って下さいました。二ヶ月続いた深夜残業を労うような贈り物でした。



↓こちらの作品も素敵です。ぜひご覧下さい。
<http://www.youtube.com/watch?v=DhXI37u7u58>
検索は「星めぐりの歌ー宮沢賢治のオルゴールー」

ニホンミツバチとセイヨウミツバチ

人気番組でとりあげられたせいか、去年はニホンミツバチがなにかと賛美され取り沙汰されました。ニホンミツバチは、このあたりでは山蜂と呼んでいます。祖父の養蜂の始まりでもありました。私も20年程前から飼っています。一時は10箱まで増やしたことがありましたが、現在は熱中すると本業が疎かになってしまうので、飼っているというよりも空き巣箱を自由に使わせているといった感じです。

ニホンミツバチは、セイヨウミツバチよりもきゃしゃな体つきで、飛び方も軽々として、体色は白黒です。寒さに強く、天気さえよければ真冬でも飛んできます。スズメバチがくると一斉にウェーブをして羽を波のように動かし威嚇します。その時の羽音は「ウーン、ウーン」と、まるで獣の唸り声にも聞こえます。さらに皆で果敢に包み込み、高い体温で何倍も大きなオオスズメバチを蒸し殺しにすることもあります。でも、性格は温厚でそんなに人を刺さないのが特長です。巣箱の前を歩いても、巣箱を開けてもめったに刺してきません。群れの蜂数は少ないので収穫できるハチミツは少ないです。ニホンミツバチを見ていると、日本人と重ねあわせてしまい親近感がわいてきます。大型養蜂が困難な理由には「クールな性格」が上げられます。世話を焼き過ぎると群れごと逃げちゃうのです。「逃げられて元々」な気持ちで飼うのがいいようです。

近頃、ニホンミツバチのハチミツが何倍もの高値で売買され、趣味と実益を目的に飼われる方がとても増えています。うちにも飼い方やロウソクの作り方などの問い合わせが何度もありました。実家のハチミツやうちのロウソクがセイヨウミツバチのものとして知って落胆するお客様もいらっしやいました。ニホンミツバチVSセイヨウミツバチ論を戦わせる方もいます。

なんだか異常なほどのブームになりつつことは、全国でどんどん野生のミツバチが捕まえられハチミツは奪われ、冬越しできずに死んでしまうパターンが日本中で起きているのだらうと



想像すると少々哀れに思ってしまう。蜜源が少なく農薬も身近で、スズメバチも熊もいる日本のフィールドでの飼育は初心者にとってそんなにたやすいことではないのです。しかし、ニホンミツバチを飼うことにより、自然環境のことを知るきっかけになっているとしたら止むない犠牲なのかも知れません。種を保つ力は強いのでそれにより絶滅危惧種になることもないでしょう。

最後に、私はニホンミツバチのハチミツも、セイヨウミツバチのハチミツも、同じ価値があると思っています。

日本が誇る在来種ニホンミツバチは、野生に棲むミツバチとして、寒い季節も暑い季節も野山の隅々まで飛び回り、在来植物達の受粉を助け、多くの野生の生き物達や人にまで豊かな実りをもたらしています。

片や150年程前に日本に輸入された外来種セイヨウミツバチは、養蜂家にとって大切な相棒です。畜産業として一年中様々な世話をします。巣箱を掃除し、花のない季節は砂糖水を食べさせ、花のある場所に移動し、スズメバチや熊から守り、蜜源になる木も植えています。そして特別な愛情が育まれます。そして花が咲く季節に、ついにハチミツを分けてもらうのです。それにより多くの人々が健康を維持することができています。さらに私達の食べるサクランボやイチゴ、りんご…といった元々外来種の果樹の受粉活動に大きく尽力しています。蜜蝋においては医療軟膏や化粧品、絶縁材料、ワックスなど多くの分野で人々の生活を支えています。

人間にとってどちらのミツバチも同じ位感謝すべき大切な存在なのです。

このニホンミツバチのブームが、ただ消費・消耗するだけの無下なブームにならないことを、そしてニホンミツバチとセイヨウミツバチの関係に、より良い調和をもたらすことを心から願っています。

■ミツバチ観察会と昔ロウソク作り



トチノキのハチミツ収穫期。ネットをかぶってミツバチ観察をしませんか？少しドキドキしますが、巣箱の中は知らないことがいっぱいです。蜜源樹のトチノキも見に行きます。ミツバチの巣そのものに糸をはさんでロウソクも作ります。自然とのつながりを感じて下さい。

日時 5月22日(日) 午後1:30~

場所 さくら養蜂園白倉蜂場

参加費 大人1000円 小人500円

■かぼちゃランタンで小人の村づくり

紅葉のハチ蜜の森にかぼちゃランタンを並べて小人の村を作ります。

日時 11月5日(土) 午後 1:30~暗くなるまで

参加費 大人2000円 小学生1500円

近況

冬将軍と雪女が一緒になって暴れているようです。2月1日現在、工房の積雪はおそらく2メートルに達したと思われます。外にあるトイレまでの通路は背丈以上の雪の壁の間を歩いています。1月6日から毎日毎日、降り続けているので、毎日毎日、2時間も3時間も雪と格闘しているような気がします。いただいた注文も遅れ気味で迷惑をおかけしております。好きで住んでいるので愚痴はこぼしませんが、正直「もう勘弁してくれ」です。

でもおかげ様で、10~12月ロウソクより重たい物を持たなくて上がり気味だったコレステロールが下がっているようです。体も思いがけず筋肉質にしまってきました。代謝も良くなっているようです。でも、晩酌の量は増えています(笑)

通信購読について

定期購読を希望される方は、送付用の切手を送って下さい。購読期限は、お送りした時の封筒の住所下に、12-32と号数を明記しています。

雑記

「芸術家と呼ばれるなら職人と呼ばれたい」独学な自分の物づくりにどこか卑屈なものを感じ、そんなふうに思っていました。

「芸術とはなにか？」という大きな問題について、ついに明瞭な答えと出会うことができました。縁があって京都造形芸術大学の学長千住博氏の話聞く機会があったのです。感動して同大学のサイトを確認すると、お聞きしたお話と同じ内容についての動画を見ることができました。

「芸術とは、イメージーションのコミュニケーションです。自分のイメージーションを、なんとかして伝えようとする(コミュニケーションしようと思う)その心が生み出すもの。これがあるものは全て芸術なのです。ですから人間がなにかを作ろうとする、表現しようとすることは全てが芸術的行為なのです。今の世の中、このイメージーションのコミュニケーションが足らなくて起こった事件・事故があつとを絶たない。相手の気持ちや、どうなるかを想像できない。コミュニケーションが置き忘れている。今の日本は芸術的発想が弱まってしまっている。芸術的発想というのはきれいな絵を描きましょう、音楽を聴きましょうということだけではなく、自分の気持ちをなんとかして伝えたいと思う気持ちと共に、相手の気持ちも理解しよう、見てみよう、聞いてみようとする気持ち。こういことが、芸術が教えてくれる私達のコミュニケーションの第一歩なのです。芸術を学ぶということは絵や音楽を学ぶということだけでなく、人間の最も大切な人間性そのものを学んで行くこと。私達は画家や彫刻家だけを育てたい訳ではないのです。芸術的発想を持ってこれからの世の中いろいろな形で貢献できる日本のリーダー達を育てて行きたいのです。テレビ番組作りも雑誌もグラフィックも教育も立派な芸術的行為です。これからは一番重要な奥深い中心に芸術的発想をおいて社会が作られていく。そんな時代が来ることを考えた時に、芸術を学ぶ意味がもっと鮮明になる時代だと思う。私は顔料でない蛍光塗料を使って、誰も見てなかったような、見ても描けなかったような月光に照らされた滝を表すことができました。心の奥深い部分に横たわっている神秘的な思いとか、現代人の心が置き忘れてしまったなにかに触れて人間性を回復してもらいたい。そう思って描いた作品です。

21世紀の時代、芸術的発想がなければ日本も世界もおかしくなってしまう。一人でも多くの人が芸術を学んでより素晴らしい世の中を作ってくれることを私は期待しています。」(要約)

長年のもやもやが、払拭されました。芸術的発想を持った職人としてさらに研鑽します！

※千住氏の描いた滝の絵は、吉永小百合さんのアコースティックのCMでも紹介されています。